『刀工：摂州住藤原聾長綱』

岐阜県：長尾充恒

『タイトル』

今年の２月、（財）日本美術刀剣保存協会熊本支部・山田氏より『歴史に咲いた華・刀は生きている』のコピーを届きました。そのうちに『摂州鍛冶・藤原長綱』を拝読されて私としては疑問がある。著者・細野耕三氏は小説家であるが、刀剣研究家ではなく日本歴史と刀剣歴史から引用し作成であろうか。

検証

① 刀剣研究会霜華塾講師：冥賀氏（現東京都刀剣商業組合副会長）

著者：細野耕三氏の事はあんまり知らされていないが、それぞれの歴史の中から引用し作成ではないか？と述べた。

② あと付けに参考資料が全く載せなかった。

『実家と聴失』

飾磨花田村（現在・姫路市）の実家に居る本名・北村市右衛門の弟。市右衛門が七歳の時猩紅熱で聴失していた。言葉は知っているが、耳が聞こえないため孤独になり、今では人と喋ることもめったになかった。

検証

① 花田村史を調べたら記載はなかった。

② ７カ所の花田町地区寺院へ調査依頼したあと２通回答、あと５通未定。北村の姓名が載せていなかった。

③ 実家と聴失も記録の資料を調べたら記載はなかった。

『鍛冶入門』

初代・忠綱がそんな弟を『なんとかとかして一人前の人間にしょう』とおもっていたのは、前々からであった。しかし養子という立場がそれを許さなかった。

親父は溜息をつくようにして市右衛門を見た。忠綱は遠慮する父の手から奪うようにして市右衛門を引き取った。

検証

① 「長綱」が鍛冶入門の経過資料を調べたら記載はなかった。

『作刀と銘』

大坂に移ると忠綱は市右衛門に「長綱」という銘を与えた。長綱は利発な少年だった。兄の愛情に甘えず、進んで下働きに精をだした。不具者という宿命的な人生に重荷を背負った長綱が常人でも特別の才能と努力がない限り、一流の刀工になれない厳しい世界で「その作柄、一竿子忠綱（初代・忠綱の子）にも匹敵し、彫刻も仲々の上手」と「新刀弁疑」に登載されるほどの名工になろうとは誰も考えていなかった。「まずまず、よい先手（助手）になれば大出来」というのが周囲の眼だった。

彼は堂々と刀に「摂州住藤原聾長綱」と銘を切った。不具を不具と思わなくなった長綱の人生に対する強い自身がこの銘から察せられる。

検証

① 「長綱」と「聾」ともの銘を切る由来の資料を調べたら記載はなかった。

「まとめと今後の調査について」

昨年までには作刀の中心として調査を全て収集が出来て、あとは出生、入門、没についての調査はかなり難しいですが、きちんと調査を努めています。

『参考文献』

「歴史に咲いた華・刀は生きている」　細野耕三　平成9年1月14日　　星雲社